

## 新約聖書の中の奥義 第8回

## □この学び全体のアウトライン

第一部 イン트로ダクション

第二部 奥義としての神の国

第三部 教会に関する5つの奥義

第四部 イスラエルが頑なになることに関連する奥義

第五部 サタンの2つの奥義 と それを打ち破る神の8番目の奥義

## □ 第三部「教会に関する5つの奥義」のアウトライン

A) 七つの星と七つの金の燭台の奥義

B) からだの奥義

C) 内住のメシアの奥義

D) メシアの花嫁としての教会についての奥義

E) 信者の変換の奥義

## ■前回の要点

1. 内住のメシアの奥義とは、メシア、すなわち神の第二位格である子なる神が、信者の内に住んでくださるという事実を指す（コロ1:27）
2. 聖霊の内住は、奥義ではない。神の第三位格である聖霊なる神が信者の内に住むという事は、旧約聖書の中でも知られていた。
3. 旧約聖書は、メシアについての多くの預言をもっていた。しかし、メシアが信者の中に住むということは、明らかにされていなかった。メシアの内住は、新約聖書において初めて啓示された。

## □本日の内容

内住のメシアは、信者の中で、どのような働きをなさっているのか。

今回から、「メシアの現在の働き」について、学ぶ。

## □「メシアの現在の働き」のアウトライン

A) メシアの現在の地位

B) メシアの現在の働き—「神・人」として 天において 5つのこと

C) メシアの現在の働き—キリストの御霊、内住のメシアとして 地において 11のこと

D) メシアと信者たちとの関係 象徴的な7つの表現

(出典： Come and See Vol.3 “Messiah Yeshua, Divine Redeemer Christology From A messianic Jewish Perspective” P.215-220 )

## メシアの現在の働き

### A) メシアの現在の地位・・・父なる神の右に座す=父なる神と同等の地位

1. メシアは今、父なる神の右に座しておられる。その地位に至る経緯を、大まかに振り返ると・・・
  - ① 子なる神は、受肉によって人間の形を持ち、「神であり人である」お方とられた。
  - ② イエスの名をもって地上生涯。その中で受肉の目的を果たされた。
  - ③ 死・復活・昇天＝十字架上で死んで、墓に葬られ、三日目に復活した。そして復活から40日後に天に上げられ、そして、父なる神の右に上げられた。
  
2. この経緯を見るときに注目すべきことは、子なる神が天に戻られたときに、元の「神」の状態に戻ったのではなく、「神であり人である」という二つの性質を持ったまま、天に上げられて父なる神の右に座しておられる、ということである。
  - 【補足 出典同じく 211頁】イエスの人としての外見は、昇天後は大きく変わった。昇天後のイエスを描写した記事は、黙示録1:12～16
    - その目は燃える炎のようであり、顔は強く照り輝く太陽のようであったと描写されている。これは、イエスの体の内側に秘められていた栄光が輝きだしていることを示すものである(参照:マタイ17:2、ヨハネ1:14、Ⅱペテロ1:16～17)
    - また、足は光り輝く真鍮のようであったと描写されている。もはや十字架の釘の跡はない。
    - このようにイエスの人としての外見が変化していることは、何を示しているか → 天に入った時点で、イエスの復活体が栄化されたことを示す。
  
3. 預言
  - ① 詩篇80:17 あなたの右にいる人の上に 御手が、ご自分のため強くされた人の子の上に 御手がありますように。
    - 詩篇80篇の内容・・・イスラエル民族の中の信仰ある残れる者たち＝レムナントが、神に向かって「どうか帰って来てください」(80:14)と願う祈り
    - 「あなたの右にいる人」とは、メシア
    - この詩篇が書かれた時点では、まだメシアは登場していない。よって、詩篇80篇は、メシア預言である。
  
  - ② 詩篇110:1 主は私の主に言われた。「あなたは わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで」

- 「主」は父なる神、「私の主」はダビデの主、メシア。ダビデはメシアを主と呼んで、神性を預言している。
  - メシアは、父なる神の右の座に着き、王として地上に再臨する時を待つ。
- ③ 新約聖書の中で、詩篇 110 : 1 をメシア預言として扱っている箇所・・・マタ 22 : 43~45、マルコ 12 : 35~37、ルカ 20 : 41~44)
- イエスが、パリサイ人たちに尋ねた。「あなたがたは、メシアについてどう思うか？ だれの子か？」 パリサイ人たちは、「ダビデの子である」と答えた。それは正しい。しかし、パリサイ人たちは、メシアがダビデ王の子孫から出る人間であるにとどまらず、神が人となられたお方であるということ、「神であり人である」お方であるという点を理解していなかった。
  - イエスは、詩篇 110 : 1 を引用し、ダビデがメシアを「私の主」と呼んでいると示し、メシアの神性を教えた。
- ④ イエス自身が、父なる神の右に座すことを預言した（マタ 26 : 64、ルカ 22 : 69）
- ⑤ イエスが父なる神の右に座しておられることを記す新約聖書の箇所・・・マルコ 16 : 19、使徒 2 : 33~36、5 : 31、7 : 55~56、ロマ 8 : 34、エペソ 1 : 20~22、コロ 3 : 1、ヘブル 1 : 3、8 : 1、10 : 12~13、12 : 2、I ペテ 3 : 22)

## B) メシアの現在の働き— 天において 5つのこと

1. 天と地のすべてを支配している（マタ 28 : 18）
  - 信者の生活の中で起きるいろいろな出来事もまた、メシアの支配の中
2. 信者たちのために、天において場所を準備している（ヨハ 14 : 1~3）
3. 神と人との間の仲介者として働いておられる
  - ① イエスは、父なる神と人間との間の仲介者である。
    - I テモ 2 : 5 神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです。
  - ② 旧約聖書の時代、イスラエル民族には、レビ族の中のアロンの家系から、大祭司が立てられた。大祭司は、神とイスラエル民族との間の仲介者であり、大祭司のみが神の箱、贖いの蓋の前に立つことができた。贖いの蓋の上には、神の栄光が輝いていた。
  - ③ ヘブル 5 : 1 「大祭司はみな、人々の中から選ばれ、人々のために神に仕えるように、すなわち、ささげ物といけにえを罪のためにささげるように、任命

されています」 → 大祭司は、人間であることが条件。

- ④ 子なる神も、神と人との間の仲介者となるために、人間となる必要があった。受肉され、そしてイエスという名をもって、人となられた理由は、ここにもある。
- 【補足】もうひとつの理由は、「いのちとして贖いをするのは血である」(レビ 17: 11)
- ⑤ 【補足】
- イエスは、イスラエル民族だけの仲介者ではない。また、信者だけの仲介者ではない。神とすべての人との間の仲介者である。そしてその仲介者は「唯一」である。このお方以外に、仲介者はいない。→ 使徒 4: 12 「この方以外には、誰によっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです」
  - I テモ 2: 5 の前後の文脈からも、「すべての人間」の仲介者であることは明白である。
    - I テモ 2: 4 「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。」
    - I テモ 2: 6 「キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自分を与えてくださいました。」
  - よって、未信者にとっても、イエス・キリストは、神と自分との間の仲介者である。

#### 4. 罪を犯した信者たちのために、弁護人また慰め主として働いておられる

- ① I ヨハ 2: 1 もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなして(別訳「弁護して」)くださる方、義なるイエス・キリストがおられます。
- ② ヨハ 14: 16 わたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主(助ける者)をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます
- 「もう一人の助け主」とは聖霊、一人目の助け主はイエス
  - 助ける者というギリシヤ語の別訳は、慰める者
- ③ ヘブ 9: 24 キリストは、本物の模型にすぎない、人の手で造られた聖所に入られたのではなく、天そのものに入られたのです。そして今、私たちのために神の御前に現れてくださいます。
- ④ 弁護の必要性←サタンの活動
- 黙 12: 10 私たちの兄弟たちの告発者、昼も夜も私たちの神の御前で訴える者
  - これは、サタンである(9節)。サタンは、神の御前に出て信者たちを訴える権限を持っている。
  - 信者が罪を犯して、それを神の前に告白せずにいると、遅かれ早かれ、

サタンが父なる神の前に来て、その罪を根拠に信者を訴えるであろう。

- このようなサタンがいるために、メシアによる弁護が必要となる。サタンがどのような罪を持ち出そうとも、メシアは「その罪はわたしに付けよ。わたしはすでにその罪のための支払いを済ませている。十字架の上で支払い済みである。」と言われるであろう。

5. 弱く無力な信者たちのために、とりなしをしておられる

- ① ロマ 8 : 34 だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなして下さるのです。

- ② ヘブ 7 : 25 イエスは、いつも生きていて、彼らのためにとりなしをしておられるので、ご自分によって神に近づく人々を完全に救うことがおできになります。

➤ 「ご自分によって神に近づく」

◇ 「ご自分によって」とは、イエスを通して という意味。天において、父なる神に実際に近づくのは、イエスである。

◇ 「近づく」と訳されているギリシア語の基本的な意味は、誰かと顔と顔を合わせて会うということ。

◇ イエスは、とりなしをする者として、父なる神の前に行き、父なる神と顔と顔を合わせて、私たちに代わり、私たちにとって有益となるように、私たちの案件について申したてて下さる。

➤ ゴールは完全な救いである。信者は誰一人、落ちこぼれる者はいない。

- ③ とりなしの働きは、大祭司の職務である。

- イエスは、預言者、大祭司、王の 3 つの職務を担うお方である。地上の公生涯では預言者として働かれた。昇天後の天において、今は、2 番目の職務、大祭司として働いておられる。3 番目の職務、王として働かれるのは、将来、メシアの王国（千年王国）においてである。

- ④ とりなしの対象となるのは、信者のみである。イエスはそのように約束をされた（ヨハネ 17 : 9、20）。イエスは、不信者のためには、決してとりなしをしない。

- ⑤ 信者は、いつ、どのようなことのために、イエスによるとりなしを受けるのか、それは、誘惑を受けているときである。

- ヘブ 4 : 14~16 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでしたが、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。ですから私たちは、あわれみを受

け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

➤ 誘惑を受けて私たちが失敗しそうなきも、メシアのとりなしによって、私たちは大胆に父なる神に近づき、あわれみを受け、恵みをいただき、折にかなった助けを受けることができる。

- **ヘブ 10 : 21~22** また私たちには、神の家を治める、この偉大な祭司がおられるのですから、心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。
- 2018年1月14日熊本集会「ヘブル人への手紙」の資料より
  - 神に近づく（神にお会いする）＝神を礼拝する、神に祈る
  - 神に近づくための2つの条件
    - ◇ 「全き信仰をもって」＝完全な信仰とは、成熟した、大人の信仰。信者は信仰によって生きる。神は約束したことを成し遂げることができるお方である。真実な神とは、約束を必ず守る神という意味。神の約束は必ず成ると、神を信頼するのが、成熟した信仰である。
    - ◇ 「真心から」＝うわべだけでなく、本当に神に信頼すること
  - 神に近づく手段 2つ これは神が用意してくださること
    - ◇ 「心に血が振りかけられて邪悪な良心をきよめられ」＝文法上は完了形。過去にすでにきよめられ、今も継続してきよい。これは、信者が【イエスにある】という地位をいただいたとき、完全に聖いという地位を与えられていることを意味する。神の目から見たとき、イエスにある信者は、完全にきよい。
    - ◇ 「からだをきよい水で洗われ」＝これも完了形。過去にすでに浴槽に入れられ、今も継続して浴槽に入れられている状態を示す。これは、実際の日々のきよめ。イエスは信者たちを日々きよめてくださっている。信者の聖化は、地上を歩む限り、続いている。
- メシアのとりなしの目的は、ただ助けることではない。「からだをきよい水で洗われ」→私たちを日々きよめることである。聖化されること、これが信仰生活の歩みである。